



人妻フルコース

～熟れ頃・食べ頃・味見頃～

芳川葵

挿絵 / asagiri

立ち読み版



第一章	妖艶妻の誘惑レシピ……………	4
第二章	熟妻の特製ジュース……………	58
第三章	美しすぎる若妻の葛藤……………	109
第四章	熟妻と艶妻 活き作りになされた僕……………	165
第五章	デザートは三種の生肉 淫蜜添え……………	225

登場人物

Characters

秋山 拓実

(あきやま たくみ)

ごく普通の高校生。指定校推薦で早々に大学に合格し、四月からの一人暮らし生活に備えて料理教室に通い始める。

森口 悠里

(もりぐち ゆうり)

半年前に結婚したばかりの二十六歳の新妻。楚々とした佇まいで、抜群の美貌とスタイルを併せ持つ。

坂下 晴恵

(さかした はるえ)

妖艶な雰囲気を持った三十六歳の人妻。気取りのない性格で、拓実に気軽に話しかけたり、からかったりする。

並木 千佳子

(なみき ちかこ)

母性的で豊かな肉体を持つ四十二歳の人妻。「Chikako's Kitchen」を主催する料理研究家。

「えっ、F、カップ……」

「あらあら、失礼しちゃうわね。目の前に本物のオッパイがあるのに、悠里ちゃんのオッパイを想像してウツトリしちゃうなんて。それに、さつきも言ったでしょう。彼女は新婚さんだって」

「あつ、いえ、だから僕は、決して、そんなつもり……は……」

ハツとした様子で自己弁護をしようとした拓実だが、改めて晴恵に視線を向けてきた瞬間、その言葉は尻すぼみとなっていた。少年へのからかいを送りつけつつ、艶妻はホットパンツも脱ぎおろしていたのだ。ブラジャーとペアとなった、悩ましいパンティが露わになっている。

「ふふふつ、どう、この下着。セクシーじゃない？」

「は、はい。とつても、色っぽい、です。あ、あの、もしかして、晴恵さんのお願いつて、僕と、最後、まで……ゴクッ」

晴恵がしなを作つて問いかけてやると、拓実は上ずつた声で答えてきた。その顔には驚きと、そして脱童貞への期待がありありと浮かんでいる。

「あら、童貞くんが人妻とセックスできると、本気で考えているのかしら。ずいぶんと凶々しいわね。もう「くん」付けはなしよ、拓実」

「あつ！ いえ、その、す、すみません、僕……。ほ、ほんと、申し訳ありません。失礼なことを言ってしまった」

（あん、こんなに慌てふためいちゃうなんて、本当に初心で可愛い。私のほうがキュンキュンしてきちゃう）

わざと蔑んだような言葉を投げつけた晴恵に、未経験の少年は途端に狼狽を露わにした。その態度が、三十路女の母性をくすぐる。さらには、高まっていた淫性も妖しく揺さぶられ、大洪水の淫裂から、新たな蜜液が薄布のクロツチに溢れ出した。

「うふふッ、可愛い反応してくれるわね。せっかくだから、お願いしちやおうかなあ。拓実のそのカチンコチンの童貞チンポで、人妻のいやらしく濡れたオマ○コ、いっぱいズポズポしてちょうだい」

「えっ!? はっ、晴恵、さん？」

「拓実の濃厚ザーメンに当てられて、私の身体もすっかり火照っちゃってるのよ。且那は出張で当分帰ってこないし、ちゃんと責任取って欲しいんだけど」

事態の展開についてこられていない様子の拓実に、晴恵は妖艶な微笑みでそう言う。と、両手を背中にまわし、ブラジャーのホックを外してしまった。ふるんと揺れながら、乳房が姿をあらわす。ブラジャーはそのまま、フローリングの床に落とした。

熟れていながら張りにも恵まれた双乳は、綺麗なお椀形をしていた。薄茶色の乳暈の中心に、ベージュがかかったピンク色の乳首が載っている。乳頭は、熟体の興奮をあらわすように、球状に硬化していた。

「はあ、晴恵さんのオッパイ、とつても綺麗な。ほんとにいいんですか、僕と……」
「拓実こそいいの。こんなおばさんが、初めての相手で」

少年の熱い視線に全身がさらに熱くなっていく。ネットリとした眼差しで拓実を見つめたまま、晴恵の両手がパンティの縁に這わされた。

「もちろんです。晴恵さんみたいに綺麗な人と初体験できるなんて、夢みたいです。よっ、よろしくお願いします」

耳まで真っ赤に染めた少年が、最敬礼をするように、深々と頭をさげてきた。

「うふっ、いいわ。拓実の童貞、私がもらってあげる。でも、誰にも秘密よ。私はこれでも人妻なんだから。うふふっ、あなたも上のシャツ、脱いじゃいなさいね」

（はぁん、言っちゃったわ。拓実くんの童貞、本当に私がパッくんすることになるなんて、数時間前までは想像もしていなかったわ）

肉洞の疼きに身を焦がしつつも、晴恵は余裕ある口ぶりで指示を与える。次いで、濡れた淫裂に股布が貼りつく薄布を、腰を左右にくねらせながら脱ぎおろす。

デルタ型の草叢が露出した次の瞬間、ンヂユツ、粘ついた音を立て、クロッチが秘唇から離れた。股布と淫唇の間に蜜液の細い糸がのびていく。

「ああ、すつ、すつごい。女の人の、は、裸……。ゴクツ」

「うふふつ、女性の裸を見るのも初めてなのね」

「はひい」

Tシャツを脱ぎ捨て、靴下まで脱いだ拓実が、全裸で陶然と熟女の裸体を見つめてきていた。その素直に欲望をぶつけてくる、ぶしつけでありながらも真っ直ぐな眼差しが、パンティを足首から抜き取り全裸となった晴恵の性感を刺激してくる。

（すれていない男の子って、やっぱり可愛いわ。あぁん、もうすぐ、あの逞しいオチンポが、私の膣中に……。あなた、ごめんなさい。私、初めて不倫をするわ）

長期出張中の夫に心の中で詫びながらも、艶妻の肉体は期待でさらに高まっていた。「じゃあ、まずは拓実が男になる場所を、見せてあげなくちゃね」

「男になる場所って、そ、それは、つまり……」

「そうよ。オ・マ・〇・コ、よ。ほら、こつちにいらっしやい」

拓実の視線が艶やかに繁茂したヘアに注がれたのを感じつつ、晴恵は妖艶な声音で囁いた。そのまま、独立したキツチンスペースの近くに置かれていたダイニングテー

ブル前へと移動し、椅子を一脚引き出して腰を落とした。

童貞少年が引き寄せられるように近づいてくる。細めた瞳でそれを見つめ、ゆつくりと両脚を開いてやった。ンチュツ、濡れた淫唇が開く蜜音が耳朶を震わせる。

「はあ、晴恵さん……。ゴクツ、こ、これが女の人の、晴恵さんの、オマ、○コ……」
崩れ落ちるように、三十路妻の脚の間に膝をついた拓実が、卑猥に口を開く秘唇を真つ直ぐに見つめてきた。

（あんツ、見られてる。夫以外の男性に、それも高校生の、童貞の拓実くん私に私のいやらしく濡れたオマ○コ、見つめられちゃってるう）

晴恵の背筋に背徳の震えが駆けあがり、蜜壺がキュンキュンツとわなないた。

艶妻の陰唇は、薄褐色であった。経験の豊かさをあらわすように左右にはみ出した大陰唇は、溢れ出た蜜液によって、グロスを塗ったような光沢に包まれている。そして、鮮紅色の肉洞が蠕動するたびに、口を開けた秘裂から淫蜜が滲み出し、酸味を帯びた蜜臭が漂っていた。

「うふふつ、想像していたよりグロテスクだったかしら。ほら、もつとよく見ていいのよ。ここ、うんツ、この穴にこれから拓実の勃起チンポが入るのよ」

拓実の視線を淫唇に感じつつ、晴恵は両手の指をスリットの端に這わせた。はみ出

した大陰唇に指先が触れた瞬間、ゾワツとした愉悅が背筋を駆け抜ける。甘い吐息を漏らしながらも、さらに秘唇を左右に開いていく。ヂュチュツ、粘ついた蜜音を伴い肉洞内に溜まっていた淫水が肛門方向へと垂れ落ちる。

「す、凄い、です。全然、グロテスクなんかじゃありません。とつても綺麗です。ウネウネがエッチに動いているのまで見えてる。それに、このエッチな匂いもたまらないです。はあ、僕、もう……」

「ああん、自分で握っちゃダメよ」

晴恵の脚の間にしゃがみこんだ拓実は、人妻の淫裂を見つめたまま、右手でペニスを握っていたのだ。二度の射精でも衰えることがなかった強張りを、シュツシュツと扱きはじめている。

「あつ、ご、ごめんなさい」

「少しは舐めてもらおうかと思っただけど、仕方ないわね。そんなに我慢できないのなら、経験、させてあげる」

「えつ、それって、つまり、とうとう僕のこれが、は、晴恵さんの……ゴクツ」

慌ててペニスから右手を離れた少年の視線が、三十路妻の顔から再び濡れた秘唇へと注がれた。その熱い眼差しだけで、開いたままの肉洞内が焼かれてしまいそうだ。

「うふっ、そうよ。いよいよ拓実は童貞ではなくなるのよ」

（はあ、いよいよね。もうすぐ、カチンコチンのオチンポが、私の飢えた腔中に……。旦那以外のオチンポで狂わされちゃうんだわ）

ブルッと総身を震わせると、晴恵は椅子から立ちあがった。つられて拓実も立ちあがってくる。緊張と興奮で呼吸が荒くなっているのが分かる。さらには、何度も生唾を飲んでいのか、喉がひっきりなしに上下していた。

「は、晴恵さん、僕は、ど、どうすれば」

「うふふっ、そんな緊張しなくても大丈夫よ。全部、私に任せておきなさい」

結婚以来、初めて夫以外と性交渉をする晴恵にも緊張はあったが、拓実の心細そうな様子に、逆に落ち着きを取り戻すことができた。自分もしっかりと楽しみつっ、思いに残るような初体験にしてやらなければ、という気持ちも大きくなる。

「ねえ、立ったまんま、後ろからしてみない？」

「えっ、立ったままで後ろから？ それってあの、立ちバックっていう格好ですか？」

「あら、詳しいじゃない。初体験で人妻をバックからズンズン責めちゃうのよ。どう？」

艶然と微笑み、晴恵は右手を拓実の左頬にのぼすと、すっと撫でつけてやった。その瞬間、少年の全身がブルッと震えたのが分かる。

「は、はい。よろしくお願いします」

「うふっ、決まりね。じゃあ、おいで」

拓実の頬から右手を離れた晴恵は、そのままクルッと向きを変え、ダイニングテーブルの天板に両手をついた。肩幅よりも広めに脚を開くと、ボリユームのある双臂を後方に突き出していく。

「ああ、晴恵、さん……」

「なにをしているの。さあ、いらっしやい」

右手を天板から離し、開かれた脚の間から後方に突き出していく。

「はっ、はい」

上ずった声で返事をした拓実が、改めてペニスを握り締め、ゆっくりと近づいてくる。バトンの受け渡しをするように、右手で強張りの中ほどを掴んだ。熱い血潮の脈動する肉竿に、腰がブルッと震えてしまう。

「ンはっ、あつ、ああ、晴恵、さんッ」

「ああん、とつても硬くて素敵よ。もうしばらくの我慢よ、そうすればすぐに私の膣中で、男の子から男になれるのよ。だから、もうちよつとだけ耐えて」

「分かり、ました、くうう……」

かすれたうめきをあげた拓実の両手が晴恵の腰にあてがわれ、括れた艶腰が少年の熱い両手で、ガッチリと掴まれる。

「うふっ、いいお返事よ。さあ、こっちよ」

晴恵は淫悦に上気した顔を後ろにねじ曲げ、緊張と興奮で顔を真っ赤に染めた少年に頷きかけた。右手に握る硬直をゆつくりと、濡れた秘唇に引き寄せていく。

ンチュツ、粘ついた蜜音を立て、張り詰めた亀頭先端がスリットと接触した。二人の身体に同時に震えが走り、拓実の押し殺したうめきが小さく耳に届く。

（早くしてあげないと。挿れる前に出ちゃったら可哀想だし。私だって、こんな蛇の生殺し状態は勘弁して欲しいもの）

硬直の胴震いを右手に感じつつ、晴恵はペニスを握る右手を小刻みに上下させた。チュツ、クチュツ、亀頭で濡れた秘裂をこすりあげられるだけで、たまらない気持ちが高まっていく。肉洞がキュンツとなり、挿入を急かすように柔褻が一斉に蠢き出す。「ンくツ、ううう、はっ、晴恵さん、僕、出ちゃいそうです」

「あんツ、待って。すぐよ。ほんとにもうすぐなツ、うんツ、ここ、ここよ。いまオチンポの先が当たっているところが、私の入口。いいわよ、そのまま腰を突き出してきてちょうだい」

震えた声で絶頂感を告げてくる拓実には、晴恵自身も少し焦りを覚えはじめた直後、
ンヂュツと粘ついた音を立て、亀頭先端が肉洞の入口に触れてきた。

「はい。じゃあ、あの、イキます」

腰を掴む少年の両手に力がこもった。直後、グイッと腰が突き出される。

グヂュツ、くぐもった音を立て、漲る強張りが三十路妻の蜜壺に入りこんできた。

「ンはっ、あぁん、きてる。拓実の硬くて熱いのが、私の膣中を、押し広げてるぅう」
（すっ、すっごい！ こんな硬くて熱いの久しぶり。大きさはまだ、あの人のほうが優ってるけど、硬さは拓実くんのほうが、ずっと上だわ。オチンポ挿れられたの、本当に久しぶりだから、この充実感だけで、私、イッチャいそう）

肉洞を満たすペニスの存在感に、晴恵は目を剥きそうになった。根本まで埋めこまれた瞬間、鋭い喜びが脳天に突き抜け、一瞬、目の前が白くなりかけたほどだ。

半年ぶりに熱い肉棒との邂逅を果たした膣壁が、挿入時のこすりあげだけで敏感に反応し、悦びそのままにキュンキュンツとペニスに絡みついていくのであった。

「ぐカあ、ああ、しゅ、しゅぐ、イ、これが、女の人のオマ○コの中……。ヒダヒダが絡みついて、こすりあげられてるよ。はあ、気持ちよすぎて僕、すぐにでも、出ち

やいそうです」

晴恵の腰を両手でガッチリと掴んだまま、拓実は顔をのけぞらせた。

初めて体験した女性器は、挿入直後から柔褻がウネウネと絡みつき、想像を絶する快感を与えてくれている。

（本当に僕のが晴恵さんの膣中に……。料理教室で一緒にいる人妻さんのオマ○コに、入っているんだ。僕、童貞じゃなくなったんだ）

視線を下に向ければ、ボリュームのある熟れたヒップに腰が密着している様子が飛びこんでくる。晴恵が双臀を突き出すようにしているため、両手で掴むウエストラインの括れが、より強調されているのだ。さらには白い背中に少しかかったブラウンヘアが、視覚から興奮を誘ってくる。

「あんッ、まだ、出してはダメよ。動かすのよ。腰を前後に振って、私のオマ○コをズリズリしなさい」

「ンはっ、ああ、そんな腰揺すられたら僕ううう。はあ、ダメです、そんなこと、腰なんか動かしたら、あつという間に、出ちゃいますよ」

「私を感じさせてくれたら、このままナマで出してくれていいから。だから、腰を使って。人妻のオマ○コを堪能できちゃう高校生なんて、滅多にいないんだから、思い



きり楽しみなさい」

悩ましく上気した顔を後ろに振り向けた晴恵が、腰をクイクイッとくねらせてきた。そのわずかな動きでも柔褻の蠢きが微妙に変化し、強い快感をもたらしてくる。

「あつ、ああ、晴恵、さん……」

「動くのよ、拓実。もし上手にできたら、また相手してあげるから、だから」

「えっ、また！ ほ、ほんとですか、晴恵さん」

奥歯を噛み締め、迫りあがってくる射精衝動を必死に耐えていた拓実は、晴恵からの思わぬ提案に驚きの声をあげた。悦びをあらわすようにペニスが震え、血液がさらに補充されていく。

「あう、はんッ、すつごい、まだ、大きくなるなんて……。本当よ、嘘なんか言わないわ。だから、頑張つて腰、動かしてみなさい。それが本物のセックスなんだから」

「は、はい」

艶妻の言葉に頷き返し、拓実はひとつ息を整えると、ゆっくりと腰を引き抜いていた。ンチュッ、粘ついた音を立てながら、ペニスが抜けてくる。そして半分ほど抜いたところで、再びズンッと突き出した。ニュヂュッ、蜜音が潰れ、笠を広げた亀頭がうねる膣壁に扱きあげられる。

「チュパッ、はぁン、晴恵さん、あなた、なんで……」

こちらに顔を向けた拓実の顔に驚愕が広がり、朱唇から亀頭を解き放ち、豊乳からペニスを解放した千佳子も、信じられないといった表情で、晴恵を見つめてきた。

「拓実、ずいぶんなプレイボーイぶりじゃないの。ついこの間、私の身体で童貞を卒業したばかりだというのに、もう千佳子先生ともいい関係になつてるなんて」

「あつ、いえ、あの、決して僕は、その……」

やや吊りあがり気味の瞳を悪戯つぽく細め、からかいの言葉を投げかけると、少年はアタフタした様子を見せ、目が不安げに上下左右を泳ぎ回った。

「うふっ、そういうこと。初めてじゃないんだとは思っていたけど、まさか相手が晴恵さんだったなんて。ああ、それで納得したわ。先々週から、晴恵さんが拓実くんを呼び捨てにしていた理由も、そういうことだったわけね」

艶妻の言葉と少年の動揺具合で二人の関係を理解したらしい熟妻が、こちらにも母性の中に淫靡さを漂わせた瞳で、晴恵と拓実を交互に見上げてくる。

「そうなんです。実は拓実の初めてを美味しくいただいたのは、私だったんです」

「旦那さんが出張中に高校生の男の子となんて、いけない奥さんね。まあ、私も他人様のこと、とやかく言えないけど。ああ、そうそう、このお料理の名前だったわね。

これは拓実くんの活き作りよ。鮮度抜群だから、ナマが一番美味しいと思って」

普段の温厚で柔らかな印象とは違う、四十路の色気に満ちた顔で盪惑的な微笑みを浮かべる千佳子に、晴恵もゾクツとさせられてしまった。

「あら、それは美味しそうだね。私にも食べさせてくださいよ」

「えっ、あ、あの、晴恵、さん……」

晴恵の言葉に、不安げな表情を浮かべたままの拓実が、震えた声をあげた。

「なあに、私とはもうしたくない？ 童貞を卒業できたら、私は用なし？」

「あつ、いえ、そういうことでは、でも、あの、ほ、ほんとに……。千佳子先生」

「バレてしまったものは仕方ないわ。口止めの意味も含めて、晴恵さんには満腹で帰ってもらわないと」

いきなりの晴恵の登場と、これから調理実習室で繰り広げられるであろう蜜戯に心細そうな顔をした少年は、助けを求めるように熟女講師を見つめていた。すると千佳子は、艶やかな笑顔で教え子を見上げ、甘い声音で返す。

「そういうことよ。この前は私がお奉仕してあげたんだから、今度はあなたがする番でもその前に、こんな状況でもまだ勃ったままのオチンチン、味わわせてね」

晴恵も艶っぽく微笑み、着ていた黒のポロシャツとストレートジーンズを脱ぎはじ

めた。ポロシャツの下からあらわれたのは、煽情的なワインレッドのブラジャー。レースのふんだんに使われた、ハーフカップの下着である。形のいいお椀形をしたDカップの膨らみ、その上半分が悩ましく露出している。

「ああ、晴恵さんの綺麗なオッパイ……」

「うふふつ、そうよ。拓実が初めてナマの感触を堪能したオッパイよ。そして、こっちが、拓実が男になった記念すべき場所」

陶然とした声を放つ少年に蠱惑の笑みを送りつけ、三十路妻は悩ましく腰を左右に振りながら、ストレートジーンズを脱ぎおろした。ブラジャーとペアとなった、ワインレッドのパンティが露わになる。前面に施されたレースの合間から、薄布に押し潰されたヘアがはつきりと透けていた。

「す、凄い……。晴恵さんのあその毛が、ゴクツ、スケスケになってる」

「あらあら、相変わらず色っぽい下着を着けているのね、晴恵さん」

「ご近所の目がある寂しい主婦にとつては、これくらいしかお洒落するところがないんです。千佳子先生はせっかくなエッチな身体しているんだから、もっと悩殺系の下着でもいいと思いますけど」

「私はどっちかって言うと、機能優先だからこれでいいのよ。それに、こんなおばさ

ん下着でも、ちゃんと興奮してくれるし。ねッ、拓実くん」

「えっ、あっ、はい。千佳子先生も、とつても色っぽくて素敵です」

いきなり話を振られた拓実は、一瞬ビクッと肩を竦ませ、ウツトリとした眼差しを熟女講師の肉体に向けていく。

「拓実が興奮しているのは、千佳子先生の下着じゃなくって、そのエッチな身体そのものだと思いますけど。いまだって、返事をしながら、目はGカップの爆乳ちゃんに釘づけじゃないですか」

「あっ、僕は別に、そんなつもりは……」

「いいのよ、見て。高校生の拓実くんを興奮させられるなんて、とつても光栄よ」

母性の中に淫性を忍ばせた笑みを拓実に送った千佳子は、自らの豊乳を誇示するように、両手を膨らみの下弦に這わせ、ポヨン、ポヨンと弾ませてみせた。その光景に少年の喉が盛大な音を立て、下腹部に貼りつくペニスが大きく胸震いを起こす。

「あらあら、拓実のおチンチン、もう我慢も限界そうね。まっ、お楽しみのところ私が入りしちゃったんだから仕方ないけど。お詫びに、フェラでイカせてあげる」

肉厚の朱唇の周囲を、舌でベロンと舐めてみせると、晴恵はブラジャーのフロントホックに指をかけ、プチンッと捻るようにホックを外した。タップツと揺れながら、

お椀形の美乳が姿をあらわす。

「あつ、はつ、晴恵さんの、ナマ、オッパイ……」

「羨ましいくらいに綺麗な形してるわね。張りもまだまだであつて、素敵だわ」

「私は、千佳子先生みたいな大きなオッパイが羨ましいですよ。さつきみたいに、硬いオチンチンをすっぱり包んだパイズリだつて余裕でできちゃうし」

拓実の恍惚と千佳子の羨望の言葉に、晴恵は自虐的な笑みを返した。Dカップの膨らみは決して小さくはない。世間一般では大きな部類だ。それでも、四十路妻のような、いかにも母性が詰まったたわわな膨らみには、憧れを抱いてしまう。

「二人のオッパイは、りよ、両方とも、すつごく素敵ですよ。千佳子先生の大きなオッパイは、すつごく柔らかくて安心してできるし、晴恵さんのオッパイも充分に大きくて、それに柔らかさと弾力がせめぎ合っていて、とつても気持ちいいすもん」

「あら、フォローしてくれるの、優しいじゃない、拓実。ありがとう」

童貞を卒業させてやった少年の言葉に艶妻は頬を緩めると、熟妻の隣にしゃがみこんだ。左斜め前には、ドンツと高校生の強張りが聳え立ち、張り詰めた亀頭先端からは、ネットリとした先走りと淫臭がこぼれ落ちていた。

「千佳子先生、どうせなら一緒にどうです？」

「一緒って、ダブルフェラ？ うふふつ、いいわ。経験はないけど、何事もチャレンジよね」

「言っておきますけど、私だって経験ないですからね。でも、秘密の共有にはそれくらいしないと。それに、拓実のウツトリとした顔が、母性をくすぐってきますし」

「その意見には賛成。拓実くんに見つめられると、自分が甘くなるのが分かるもの」
「あ、あの、僕、我慢の限界なんですけど。ほんとに一人で一緒に、ぼ、僕のを……」
艶めいた顔を見つめ合い語り合っていると、拓実がかすれた声で割って入ってきた。
再度、熟妻と目を合わせ、うふつと微笑み合う。

「ええ、そうよ。ほうら、こうやって——チュツ、ペロ、ペロン……」

切なそうな顔で跪く熟女二人を見下ろした少年に、晴恵は妖艶に細めた瞳で上目遣いに返すと、ツンと鼻を衝く精臭の根源に向かって肉厚の朱唇を近づけた。まず、龟头先端に軽く唇を押し当て、次いで突き出した舌で肉竿の側面を舐めあげていく。

「ぐはッ、ああ、晴恵、さんツ、くうう、おおお……」

「うふつ、拓実の硬いオチンチン、とつても美味しい。先走りも濃くって、癖になっちゃいそうよ。はうツ、うんツ、チュパッ、くぼつ、ぢゅちゅ……」

敏感な反応をみせる拓実に、晴恵の性感が震えた。子宮の疼きや肉洞のむず痒さに

腰をくねらせ、張り詰めた亀頭を朱唇に迎え入れると、ゆっくりと首を振りはじめた。「ンほっ、あう、ああ、晴恵、さん。ダメですよ、そんな、僕、すぐに、でも……」
口腔内のペニスがビクンッと胸震いを起こし、喉の奥に粘度を増した先走りがピュッと叩きつけられる。

（ああ、やつぱり、拓実のこれ、硬くて素敵だわ。若いから旦那のより、先走りも濃
いし、旦那とおざなりなセックスをするくらいなら、こうして拓実のをしゃぶって
い
るほうが、ずっと感じちやうかも）

真横にいる千佳子の存在も忘れ、晴恵は一心に男子高校生のペニスを愛撫して
い
くのであった。

—2—

「ンくうう、ダメ、ですよ。晴恵、さん、激しすぎ、ますう。おおお……」

背中をホワイトボードに完全に預ける形の拓実は、突きあがる射精感に翻弄されて
いた。霞みそうな視線の先には、上目遣いにこちらを見つめながら頬を窄める三十路
妻の淫顔。さらに視線を下に向けると、お椀形の膨らみがぶるん、ぶるんと悩ましく
揺れるさままで飛びこんでくる。

（まさか、晴恵さんが戻ってくるなんて……。おまけに、千佳子先生の横で裸になって、僕のを……）

ヂュパッ、くちゅつ、首が振られるたびに、ペニスは朱唇粘膜で扱かれ、口腔内の亀頭には生温かな舌が、ネットリと絡みつき、こすりあげてくる。

「す、凄いわ。晴恵さんのお口に、本当に拓実くんのが……」

晴恵の左隣にしゃがみこむ千佳子のかすれた声に視線を向けると、母性溢れる熟女は恍惚の眼差しで拓実の股間を見つめていた。

ふっくらとした朱唇は悩ましく半開きとなり、熱い吐息を漏らしている。さらに、腰をくねらせながら、むっちりとした太腿同士をこすりつけ合っていた。そのたびにGカップの熟乳がタプン、タプンと震えるように弾んでいるのが分かる。

（はあ、千佳子先生、普段のふんわり柔らかな優しい雰囲気とはまるで違って、すごく色っぽい。こんな素敵な先生ともエッチできるなんて、なんて幸せなんだろう）

熟妻を見つめる拓実の強張りが、艶妻の口腔内で再び跳ねあがった。亀頭が晴恵の上顎を叩き、その粘膜の感触に、ゾワッと背筋は震え、陰囊がキュンツと縮こまる。

「チュパッ、くちゅつ、ンぽつ、ぢゅぱつ、ンぱあ……。はあ、どうしたんです、千佳子先生。私が拓実のこれ、独占しちゃうってもいいんですか。もうすぐ、発射しそ

になつてますけど」

「えっ、そ、それは……」

「はあ、はあ、千佳子先生もお願いします。僕のこれ、晴恵さんだけじゃなく、千佳子先生にも、気持ちよくして欲しいです」

「ああん、拓実くんまで。いいわ、してあげる。——チュッ、ペロン、チロチロ……」

母性的な瞳を淫靡に濡らした熟女は、小さく頷くと、ペニスに身体を寄せてきた。

張り詰めた亀頭に軽く口づけをしたあと、半開きの朱唇を悩ましく開いて舌を突き出し、張り出したカリの段差部分を集中的に舐め回してくる。

「おうッ、ああ、ち、千佳子、先せい……」

千佳子から施されたいきなりの刺激に、脳天には愉悅が突き抜けていく。眼前がホワイトアウトしそうな快感に、後頭部をホワイトボードにぶつけてしまった。ゴンッという鈍い音が調理実習室に響く。

「チュッ、レロれる、ンはあ、どう、拓実くん、気持ち、いい？」

「はいい、僕、あと少しつづけられていたら、ゴクッ、出ちやいそうでした」

「ああん、それは残念。出ちやうまでつづければよかったわ」

「ダメよ、拓実。出す前に、ちょっと答えて欲しいことがあるのよ」

甘くかすれた声で会話をする拓実と千佳子の間に割って入った晴恵は、いきなり右手をのばし強張りの根本をギユッと握りこんできた。ビクッと腰が震え、悦楽が高まるものの、射精は許されないもどかしさが総身を駆け巡る。

「くはッ、ああ、そんなきつく根本握られたら、僕ううう……。くう、なんですか、答えて欲しいことって」

「それは、森口さん、悠里ちゃんと拓実の関係よ」

「えっ!!」

（なんだ、それ……。なんで、晴恵さんが僕と悠里さんのことを……。そもそも先週、晴恵さんは料理教室に来てないのに、どうして悠里さんのことを……。）

まったく予想していなかった一言に、思考が完全にフリーズしてしまう。ただポカッと口を開け、妖しい微笑を浮かべる艶妻を見つめ返すことしかできなかった。

「あら、なあに、それ。拓実さんと森口さんがどうかしたの？」

「あつ、いえ、ど、どうも、しません、よッ！　ぐくッ、ダメ、晴恵さん、そんなに力いっぱい握られたら、僕のが、つ、潰れちゃううう」

不思議そうな顔をする千佳子に対して首を横に振る拓実は、直後、白目を剥きそうになった。右手でペニスの根本を握りこむ晴恵の左手が陰囊に這わされ、睾丸をギユ

ツと握りこむようにしてきたのだ。

「正直に言いなさい。そうね、この根本をタコ糸できつく縛って射精できないようにしてから、私と千佳子先生は帰宅しちゃうけど、それでもいいの？」

「ちよつと、晴恵さん」

「千佳子先生だって、平気で嘘をつく男とエッチなんかしたくないでしょう」

「それは、そうだけど……」

「さあ、拓実、正直に言いなさい。ご褒美が欲しくないの？」

驚きの表情を浮かべる千佳子に意味ありげな微笑みを浮かべた晴恵は、睾丸を弄んでいた左手を、今度は張り詰めた亀頭に這わせてきた。指先で甘く鈴口周辺を撫でてくれる。むず痒くも鋭い愉悅が、一気に突き抜けた。

「んくッ、はう、ああ、はっ、晴恵、さんッ」

拓実は身をくねらせて悶えた。強張りに小刻みな痙攣が襲い、睾丸が根本に体当たりをしてくる。しかし、根本を押さええられているため、射精はできないのだ。

「すごい、手が弾かれちゃいそうなほど、ピクンピクンしてる。タマタマに溜まっている濃厚ザーメン、出したくないのかな？」

「出したい！ 出したいです。出させて、くうう、ください」

「じゃあ、正直に。新婚の悠里ちゃんと、どういう関係になっちゃったのかな？」
（悠里さんとのこと、言うのはやっぱり、マズイよなあ。でも、この中途半端な感覚から、早く抜け出したい。ああ、悠里さん、ごめんなさい、僕、ぼく……）

悪戯っぽく、この現状を楽しんでいるような艶妻を、悶え皺を刻んだ顔で見下ろした拓実は、目先の欲望に抗うことができなかった。

「じ、実は、僕……」

奥歯を噛み締めた声で、先週の出来事を二人の熟女に打ち明けた。

電球交換のため訪れた森口家。悠里が誤ってシャワーを出してしまったこと。透けた下着に興奮し抱きついてしまったこと。そして、思わぬ告白をされたこと。

「そ、そんな……。じゃあ、あの日、森口さんは一回ここに戻って来たって言うの。今日の晴恵さんのように。そして、あの場面を……」

千佳子の顔が羞恥に染まった。四十路妻の自分が、全裸の男子高校生に跨がり、卑猥に腰を振っていた場面を、料理教室の生徒に見られていた、その衝撃の大きさは拓実が想像する以上だろう。

「それで、それだけじゃないんでしょう。セックス、したんでしょう」

「は、はい。ご、ごめん、なさい」

晴恵のさらなる追及に、拓実もほのかに頬を染めて頷いた。若妻の狭く、締まりの強い蜜壺を思い出すと、ビクンツとまたしてもペニスが跳ねあがってしまう。

「でも、信じられないわ。あのおとなしそうな森口さんが、旦那さんを裏切つて拓実くんとそんな関係に……。私や晴恵さんと違って、まだまだ新婚さんなのに」

「あの、それなんですけど、どうやらワケありみたいなんです」

悠里との二回戦終了後、拓実は若妻から夫との本当の関係を聞かされていた。さすがに詳細は省いたが、夫と上手くいっていない部分があるらしいとだけ伝えていく。

「なるほど。彼女も色々大変つてことね。まっ、私も千佳子先生も、夫がある身で拓実とこんな関係になつてゐるわけだから、悠里ちゃんのこととは内緒にしてあげる」

「ありがとうございます。千佳子先生も、よろしくお願いします」

「ええ、分かったわ。安心して、誰にも言わないから」

艶妻と熟妻、二人から言質を取ったことで、拓実の心にホッと安心が広がった。同時に、遠ざかっていた射精感が、再びムクムクと頭をもたげてくる。

「じゃあ、約束通り、この破裂しそうなオチンチン、楽にしてあげるわ。千佳子先生、二人で一緒に亀頭をペロペロして、拓実の濃厚ザーメンで、顔パツクしません？」

「もう、晴恵さんだったら、よくそんなエッチなことを思いつくわね」

「だって、高校生の濃いザーメンを浴びる機会なんて、ないじゃないですか。それとも千佳子先生は、拓実以外にも？」

「そんなわけないでしょう。うふっ、でも、確かにこんな機会はないわね。いいわ」
「晴恵さん、千佳子、先生……」

（まさか、二人がこんなに食欲だったなんて……。精液の顔パツクって、それって顔射しろってことだよな）

二人の熟れた人妻の会話に、限界寸前のペニスがまたしても大きく跳ねあがった。破裂しそうなのに、根本を抑えこまれているためもどかしさの募った亀頭は、トロツとした先走りを滲ませ、鬱血したように赤黒くなっている。

「じゃあ、左右から同時に亀頭を舐めてあげましょうよ。拓実、まだ出しちゃダメよ」
切なそうに腰をくねらせる拓実に、晴恵が上目遣いに声をかけてきた。荒い呼吸の中、何度も首肯する。すると艶妻は一層目を細め、亀頭の左側に舌を押しつけてきた。

「レロ、チュツ、ペロペロ……」
「ンほう、ああ、晴恵、さんッ」

ネットリとした生温かな舌が、張り詰めた亀頭を甘くさすりあげてくる。絶頂寸前だけに、突き抜ける喜びは目も眩むほどだ。しかし、いまだに根本をきつく握られ

ているため、射精することをは叶わない。もどかしさばかりが募っていく。

「待って拓実くん、まだ出さないで、私も。——チュパッ、ヂュッ、チロチロ……」

晴恵の言葉にすっかり淫性を目覚めさせてしまった様子の熟妻が、慌てたように亀頭の右側に朱唇を近づけると、横笛を吹くようにカリの段差部を唇に浅く啜えこみ、舌を細かく震わせてきた。

「くふおう、あう、ああ、ちッ、千佳子先生、まつ、でええええ」

腰が抜けそうな淫悦に、拓実は奥歯をきつく噛むと、小刻みに震えはじめている両手を、二人の熟女の肩にのばした。熟れた肩肉をギュッと掴んでいく。

「ヂュパッ、うんッ、そんなきつく掴まれたら、肩、痛いじゃない」

亀頭だけではなく、肉竿にまで舌を這わせ、アイスキャンディーのようにペニスを舐めていた晴恵が、いったん舌を強張りが離し、眉間に皺を刻んで見上げてきた。

「す、すみません」

「うふふっ、でも、ほんとに出ちやいそうなのね。いままで以上にビクンビクン震えて、本当に私の右手、弾き飛ばされちやいそう。いいわよ、出しなさい。右手、離すわよ。チュパッ、レロれろレロ……」

謝る拓実に、再び艶然とした微笑みを浮かべた艶妻は、亀頭を肉厚の朱唇に啜えこ

み、鈴口を舌先で激しく刷いてきた。

「ンぐッ、はう、あああ……」

意識が飛びそうな快感と、いまだ許されぬ射精に、拓実はゴンゴンと後頭部をホワイトボードにぶつけた。亀頭は先ほどから痛みを覚えるレベルに達しており、このままでは射精する前に、亀頭が爆散してしまうのではないかと思えるほどだ。

（ダメ、ほんとに僕……。出せないのに、晴恵さんと千佳子先生のエッチな姿ばかり目に飛びこんでくるし、はあ、このままじゃ、発狂しちゃいそうだよ）

射精を許されない拓実の視界には、匂い立つ艶顔を惜しげもなく晒す二人の熟女の顔と、砲弾状とお椀形の熟乳四つが、ユツサユツサ、タツプタツプと揺れている淫態が飛びこんできており、切なさでどうにかなくなってしまいそうであった。

「ンむうン、ペロ、ペローン……」

「ンはあ、晴恵さん、本当にそろそろ出させてあげないと、拓実くんが可哀想すぎるわ。チュツ、チロチロ……」

拓実の様子に、それまで甘くカリと竿の段差部分を齧っていた千佳子が、隣で亀頭裏の窪みに舌先を突き入れた晴恵に意見してくれた。

霞む眼差しでうんうんと頷いた直後、三十路妻の右手が根本から離された。

ふわつと一瞬、身体が宙に浮くような感覚が襲う。

次の瞬間、陰囊内できぐるを巻いていたマグマが、一気に進り出た。

ドビュツ、どびゅ、ずびゅつ、ズビュビュ……。

「くはあ、ああ、出る、出てる。おとおお……」

「あんツ！ いいわ、これよ。この濃厚なザーメンが欲しかったのよ」

「キヤツ！ あんツ、す、すつごい、熱くて、濃いのがほんとに顔に……」

ネットリとした精液が晴恵と千佳子、二人の顔に降り注いでいく。驚きと恍惚にまみれた二人の淫顔が、拓実の性感をさらにくすぐり、射精の脈動に油を注いでくる。

「ごめんなさい。千佳子、先生。でも、僕、ああ、ずつと、押さえつけられていたから、くうう、全然、射精が、止まらないよう」

ドビュビュツ、ずびゅつ、ドクン、どびゅん、ズビュ……。

法悦に染まる顔から首筋。そして、たわわな砲弾状と美しいお椀形をした乳房へ。快感に霞む視線の先で、熟女の裸体に白くて濃い絵の具がぶちまけられていく。

（ああ、凄い。僕、本当に千佳子先生と晴恵さん、二人に向かって射精、したんだ）

ペニスを襲うあまりに激しい絶頂痙攣に、拓実は白濁液を噴きあげた状態で、ズルズルと床にくずおれていくのであった。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!